

Herman Melville の “Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs” について

岡 村 仁 一

1. はじめに

Sealts の言う Melville の “two-part pieces” (492) の一つである “Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs” は他の二作品, “The Two Temples”, “The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids” 同様, 一方が米国, もう一方が英国を舞台とする二つのパートから出来上がっている。

本論ではこの “Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs” に的を絞り, “two-part piece” ならではのテーマ設定とそれを具現化する技法について検証していきたい。

2. PICTURE FIRST: Poor Man’s Pudding

第一のパートはニューイングランドの片田舎が舞台になっている。かれこれ四十年前の三月の終わり, 保養のため, 田舎暮らしの友人, Blandmour の家に滞在していた「私」は湿っぽい雪の降る道を Blandmour と話しながら歩いている。詩人である Blandmour は言葉巧みに様々なものを「貧者の○○ (Poor Man’s …)」と喩えて語り手に聞かせる。

This snow, now, which seems so unseasonable, is in fact just what a poor husbandman needs. Rightly is this soft March snow, falling just before seed-time, rightly is it called “Poor Man’s Manure.” (289)

たとえばこの雪にしたって, 全く季節外れのようにでいて, 実際は貧しい農夫が喉から手が出そうなほどにほしがっているものですよね。こうした柔らかな三月の雪が種まきどきの直前に降るのもなるほどと頷けるし, まさに「貧者の肥やし」と呼ばれているのも当を得ていますよね。

Did you never hear of the “Poor Man’s Eye-water?” ... Take this soft March snow, melt it, and bottle it. It keeps pure as alcohol. The very best thing in the world for weak eyes. (290)

「貧者の目薬」なるものを聞いたことがありますか? … この柔らかな三月の雪を運んできて, それを溶かし, 罎に入れます。そしてそれをアルコールのように純粋な液体にしておきます。するとこれがまた眼の弱い人にはまたとない妙薬になります。

Why, in making some culinary preparations of meal and flour, where eggs are recommended in the receipt-book, a substitute for the eggs may be had in a cup of cold rain-water, which acts as leaven. And so a cup of cold rain-water thus used is called by housewives a “Poor Man’s Egg.” (290)

挽き割りトウモロコシと小麦粉の料理を作るときは卵を使うのがよろしいと物の本には書いてあります。しかし卵の代用として冷たい雨水をカップ一杯使用することもでき、これがふくらし粉として作用します。このようにして利用するカップ一杯の雨水のことを家庭の主婦たちは「貧者の卵」と呼んでいるのです。

Then there's "Poor Man's Plaster" for wounds and other bodily harms; an alleviative and curative, compounded of simple, natural things; and so, being very cheap, is accessible to the poorest of sufferers. (291)

それから、傷やその他の体の障害に効く「貧者の膏薬」というのもありますよ。ごく単純な天然物でできた痛み止めの生薬で、大変に安いので、どんなに貧乏な病人でも入手できます。

Blandmourの説によると、同一の物質である水（もしくはそれが変容した雪）が、「肥やし」でもあり、「目薬」でもあり、「卵」でもあり、「膏薬」にもなりうるということになる。Dillinghamは「彼[Blandmour]はその上に貼り付けて人生のあらゆる闇夜を曖昧にしてしまう明るい楽天主義のラベルを所有している(He has a label of bright optimism to paste over and thus obscure every black night of life.)」(120)と言う。Blandmourの説明を素直に受け入れられない語り手は次々と疑問を呈するが、それに対して「ラベルが問題視されると、彼[Blandmour]はラベルに合わせるために現実の方をゆがめている(When the labels are questioned, he distorts reality in order to make them fit.)」(121)とDillinghamは指摘している。この場面で語り手は敢えてBlandmourのラベルを剥がそうとせず、「優しい自然のお陰で貧者はまさに自分たちの貧困の中から慰めを得ている(through kind Nature, the poor, out of their very poverty, extract comfort)」(291)というBlandmourの主張を「続け(Go on.)」(291)させ、Blandmourから「貧者のプディング(Poor Man's Pudding)」の存在を聞き出す。そして語り手はそれを試すべく「ある雨降りの月曜の午後(on a wet Monday noon)」(291)、近隣に住む貧しい木こり、Coulterの家を訪れる。

語り手がCoulterの家を訪れた場面は次のように描写されている。

I was greeted, not without much embarrassment—owing, I suppose, to my dress—but still with unaffected and honest kindness. Dame Coulter was just leaving the wash-tub to get ready her one o'clock meal against her good man's return from a deep wood about a mile distant among the hills, where he was chopping by day's-work—seventy-five cents per day and found himself. (291)

おそらくこちらの服装のせいで、私を迎えるクールター夫人は当惑顔であったが、それでも心から親切に対応してくれた。主人が山の中に1マイルも踏み入り、その奥深い山林からもうまもなく帰ってくるというので、彼女は午後1時の昼食の用意のために、ちょうど洗濯桶から離れたところであった。夫はH日75セントで木こりの仕事をし、これを天職と心得ているのだ。

作品「二つの教会堂("The Two Temples")」の語り手は、その服装のせいでマンハッタンの教会内への立ち入りを拒否され、「自由・平等を標榜する国アメリカに公爵・男爵はいないものの、それに代わる『貧富』という新たな階級が出来上がりつつあること」(岡村127)を否が応にも意識させられるのであるが、この場面での語り手もやはり服装のせいで、Coulter夫人のMarthaと平等の立場に立っていないことを意識せざるをえないのである。更に後の場面で自分はMarthaほど疲れていないと言う語り手に対し、『「あら、私は慣れているけれど、お客さんはそうではないと私には思えますわ』そういうと彼女の優しい悲しげな青い瞳は私の服装をさっと見渡した("Oh, but I am accustomed to that; you are not, I should think," and her soft, sad blue eye ran over my dress.)」(292)と再度、語り手の服装に注目するMarthaの様子が描かれている。

一方語り手にとって初対面の場で印象に残ったのはMarthaの顔の青白さであった。

... she looked pale and chill. But her paleness had still another and more secret cause—the paleness of a mother to be. (291)

・・・彼女は顔が青白く、いかにも寒そうだった。しかし顔色が悪いのは、もう一つの隠された原因があった—それは母親になろうとする者の青白さだった。

寒さもさることながら Martha が妊娠中であることがその青白さの原因であることに気づくと同時に、語り手は更に Martha の青い瞳に注目し、「彼女の柔らかな人妻らしい瞳の穏やかで諦めきった青さの中には物言わぬ底なしの心の悩みが潜んでいた (A quiet, fathomless heart-trouble, too, couched beneath the mild, resigned blue of her soft and wife-like eye.)」(291) と述べている。この青い瞳は語り手の記憶に深く刻まれ、PICTURE SECOND: Rich Man’s Crumbs でも登場することになる。

Martha に勧められるがままに腰を下ろして周囲を見回した語り手は「室内の様子が印象的であった (I was struck by the aspect of the room.)」と述べている。

The floor of that room was carpetless, as the kitchen’s was. Nothing but bare necessities were about me; and those not of the best sort. Not a print on the wall; but an old volume of Doddridge lay on the smoked chimney-shelf. (292)

台所同様、床には絨毯も何も敷いてなく、辺りには生活に必要な最低限のものしかなく、それも上等といえるものではなかった。壁には印刷物など皆無で、ただ煤けた煙突の棚に Doddridge の古い本が1冊載せてあるだけであった。

Dillingham はイギリスの牧師で賛美歌作者である Doddridge について次のように言っている。

Melville would have considered Doddridge, no less than Blandmour, a label-maker who put Christian tags on the afflictions suffered by his readers. Consider such afflictions “blessing,” he admonishes his readers, and tells them to praise God for sending troubles, which are “chastisements of love.” (127)

Melville は Doddridge を、Blandmour 同様、読者が被っている苦悩にキリスト教の付箋を貼るラベル・メーカーの一人だと見なしていたと思われる。Doddridge はこのような苦悩を「天恵」と考えよ、と読者をたしなめ、むしろ「愛の鞭」に他ならぬ苦悩を与えてくれたことに対し神を賞賛せよ、と告げているのである。

“an old volume of Doddridge” は、Doddridge の教えに従うことにより、貧しいながらもその生活を甘受し、敬虔に生きることにより平安を得ている伝統的なアメリカのキリスト教徒、Coulter 夫婦の満ち足りた日々を示すラベルとして捉えることも出来るのだが、それはあくまでも表向きのラベルにすぎず、その奥に控えているのは、既に語り手が Martha の青い瞳に見て取った苦悩、後に Martha の口から漏れる不安であり、この Doddridgeこそ、一家を貧困に陥れている元凶であることを示すラベルと捉えることも出来る。

そしていよいよ “Poor Man’s Pudding” へと話題は移り、Martha が「お米とミルク、それにお塩をかけて煮立てただけのものなんですよ (It is only rice, milk, and salt boiled together.)」(292) と語り手にプディングの説明をしていると夫の William が帰ってくる。夫に温かい食事を食べさせたくて「温かい食事は長い道のりを十分以上に補ってくれる (A warm dinner is more than pay for the long walk.)」という妻の発言に対し、夫の William は次のように言う。

“I don’t know about that,” said William, shaking his head. “I have often debated in my mind whether it really paid. There’s not much odds, either way, between a wet walk after hard work, and a wet dinner before it. But I like to oblige a good wife like Martha...” (293)

「それはどうかな？」と首を振り振り William は言った。「本当に割に合うかどうか、何度も考えてみ

たんだが、どっちもちたいたし違いはないようだね。労働の後に足をぬらして歩いてくると、労働の前にぬれた弁当を食べるとでは、どっちもどっちだよ。ただ Martha の様なありがたい女房の願いはかなえてやりたいと思ひましてね。・・・」

この夫婦間の遣り取りから、Doddridge 同様、“a warm dinner” もまた表裏相反する意味合いを持つラベルであることが伺える。すなわち、このラベルは表向きは夫の健康を気遣う妻の愛情を示すラベルとして、その一方、裏面では表とは正反対に夫を恐ろしいリュウマチに陥れる悪癖を示すラベルとして置かれているのである。William は「リュウマチやその他の病気にさえ罹らないようにしておけば、誰からも食べ物や恩義を受けずに済む (Only let the rheumatiz and other sicknesses keep clear of me, and I ask no flavors or favors from any.)」(293) と言っているが、作者 Melville にとって足をぬらすことが如何にリュウマチの危険性を増す要因として捉えられているかは、病気の女性にベッドを譲った “Cock-A-Doodle-Do!” の語り手が「小雨の中、朝までデッキに立っていた (staid on deck till morning in drizzling weather)」(270) ことが原因で右肩のリュウマチに罹り、いまだに苦しんでいることから伺える。語り手は森から戻った William の「つぎはぎだらけの長靴から水分がしみ出て床を濡らしている (the moisture oozed from his patched boots to the floor)」(293) 場面を見逃さない。そして語り手と William との間で女性一般の「気まぐれな頑迷さ (whimseys)」が話題になった折、語り手は「世の女性が全てあなたの奥さんのようにやさしい頑迷さの持ち主であると良いのですが (I wish they [women] all had as kind whimseys as your wife has)」(293) と、表向きは Martha に対する称賛ともとれる “kind” というラベルを貼っているが、このラベルはむしろその裏では “kind” であるがゆえにこの上なく頑迷であることを示すラベルとしても機能している。夫の William も森の中で “a wet dinner” を食べた方が「往復の時間の節約 (to save the long one-o'clock walk)」(293) になり効率的で（夫は健康にも良い）と思わぬわけではないが、結局、「結婚式当日と変わらず私を愛してくれている (William loves me this day as on the wedding-day)」(295) と Martha が言う妻への愛を優先させている。

やがて塩漬けの豚肉に黒パン、それからブディングという昼食が始まる。語り手は「表面に黄色みがあった皮ができていかにも不味そうな (It had a yellowish crust all round it, and was rather rankish)」(294) ブディングを味わってみる気にはとてもなれず、夫婦の様子を観察すると、Martha は「Coulter がみているときだけせせと食べている振りをして (pretend to be busy with it when Coulter looked that way)」(294) 実際には食べておらず、William も語り手に勧めめる一方で「自分は一皿、二皿、三皿食べるだけで十分である (There, one—two—three mouthfuls must do me.)」(294) と言って食事を終えてしまう。この場面でも効率よりも愛を優先する Coulter 夫婦の姿勢が伺える。身重の体や午後の労働に備えるためには自ら食事を執ることが最優先されるべき（そしてそのことが結果的には一家の幸福に繋がるはず）なのだが、それをせず、代わりに語り手に対する隣人愛、お互いを気遣う夫婦愛を優先してしまうこの夫婦の姿勢こそが実は貧困と苦悩を生む元凶となっているのである。William は病弱な Martha を教会に連れて行くための馬（この馬の名前も Martha という）を買いたいという希望を述べ、空腹のまま、また働きに出かけるが、馬に妻の名前を付けている、すなわち叶えたい夢に効率無視の「愛」というラベルが貼られている時点で、この夢の実現性がいかに低いかが際立たされているのである。それでも語り手は午後の仕事に戻る Coulter の様子を以下のように表現している。

And, snatching his soaked hat, the noble Poor Man hurriedly went out into the soak and the mire.

I suppose now, thinks I to myself, that Blandmour would poetically say, He goes to take a Poor Man's saunter.

“You have a fine husband,” said I to the woman, as we were now left together. (294-5)

この気高い「貧者」はぐしょ濡れの帽子をひつつかむや、あたふたと雨とぬかるみの中へと出ていった。

きっと Blandmour なら、彼は「貧者の散歩」に出かける、などと詩的に表現することだろうと私は

考える。

「あなたはご立派な旦那さんをお持ちですね」と二人だけになってから私は夫人に言った。

「ご立派な (fine)」というラベルも表向きの文字通りの褒め言葉とも取れるが、裏を返せば反対の皮肉な意味ともなりうる。語り手の真意がどちらに傾いているのかは、Martha が作ってくれたプディングに対し語り手が如何なる評価を下すかにかかっている。夫のためにももっと丈夫な体であったらと悔やむ Martha、さらには亡くなった 2 人の子ども、息子の William、娘の Martha の話を聞かされ、

Bitter and mouldy is the “Poor Man’s Pudding,” groaned I to myself, half choked with but one little mouthful of it, which would hardly go down. (295)

私は容易に喉を通り抜けそうにないわずかなプディングに半ば窒息しかけ、思わず呻くように、「貧者のプディング」は辛くてかび臭い、と独り言をもらした。

Martha が真心こめて作ってくれたプディングはなぜかくも不味いのであろうか？いくら愛情が注がれていてもその実体は、米はできが悪く、安値で販売されているものであったし、塩は去年の豚肉の塩漬けに使った樽から持ち込んできたもの (The rice, I knew, was of that damaged sort sold cheap; and the salt from the last year’s pork barrel.) (295) と材料の悪さが隠しようがないからである。Martha の恩寵に感謝しつつも語り手は Blandmour から念を押された様に「貧者のプディングは富者のそれと同じくらい味がよい (a “Poor Man’s Pudding” is as relishable as a rich man’s) (291) と、どうしても言うことが出来ない。

「私はもはやそのまま留まって悲しみのことばを聞いてやることはできなかった。どんなに心底から同情しても、その悲しみに対して何一つしてやれることがなかったからだ (I could stay no longer to hear of sorrows for which the sincerest sympathies could give no adequate relief) (295) と悟った語り手は、Coulter の家を去ることにする。

I offered no pay for hospitalities gratuitous and honorable as those of a prince. I knew that such offerings would have been more than declined; charity resented. (295-6)

私はこの無償の、尊い、貴公子のような歓待に対してお礼の印を差し出すことをしなかった。そのようなことをしたところで、拒まれるだけでなく、施し物として憤りを買うだけだということを私は知っていたからである。

“charity” は本来、Coulter 夫妻が依って立つキリスト教の「愛」そのものの意味であった筈なのだが、ここでは「慈善事業、施し物」の意味で用いられている。ここにも表裏相反するラベルが見て取れるのであるが、それはさておくとして、Coulter 夫妻はなにゆえ「施し物 (charity)」を嫌うのであろうか？語り手は次のように考える。

The Native American poor never lose their delicacy or pride; hence, though unreduced to the physical degradation of the European pauper, they yet suffer more in mind than the poor of any other people in the world. (296)

アメリカの貧しい民はいかなる場合も心遣いや誇りを失うことがない。それゆえ、ヨーロッパの乞食ほど物質的に困窮することがないにもかかわらず、世界のどの貧しい民にもまして精神的な痛手を被るものなのだ。

語り手がうっかり「ああ、あなたが言われているのは『貧者のプディング』と呼ばれているものですね (Ah, what they call “Poor Man’s Pudding,” I suppose you mean.)」と漏らしたとき、半ばむっとしたように彼女 Martha の顔に一瞬赤みがさした (A quick flush, half resentful, passed over her

face.) | (292) ことを語り手は見逃さない。Martha は自分と語り手との服装の違いを意識しつつも、「普遍的な平等という彼らの理想 (their ideal of universal equality) | (296) の元、相手から見下されることを由とせず、あくまでも対等の立場であろうとし、しかもそれを相手に気取られない心遣いを忘れていない。そのうえ「普遍的な平等という彼らの理想」ゆえに却って「貧困 (poverty) | (296) 」を「不名誉 (infamy) | (296) 」と感じてしまい、自らを苦しめることになる。こうして語り手は Martha の青い瞳に潜んでいた「物言わぬ底なしの心の悩み (A quiet, fathomless heart-trouble) | (296) 」の正体に漸く気づくこととなる。「それ [貧者のプディング] は貧乏人のおかみさんが自ら進んで作ったもので、しかも貧乏人の食卓で、貧乏人の家の中で食べなければならぬ (you shall eat it, too, as made, unprompted, by a poor man's wife, and you shall eat it at a poor man's table, and in a poor man's house) | (291) 」という Blandmour の指摘は皮肉にも当を得ていたといえる。

Blandmour の家に戻った語り手はその晩、お茶の後、「血色の良い彼 [Blandmour] | (291) の2人の子どものうちの1人を膝にのせ、勢いよく燃え上がる暖炉の前の座り心地のよいソファに腰を下ろしている (I sat on his comfortable sofa, before a blazing fire, with one of his two ruddy little children on my knee) | (296) が、この場面は全て昼間の Coulter の居間とは対照的である。すなわち「旧式のがたがたの椅子 (an old-fashioned chair of an enfeebled condition) | (291) 」に対し“his comfortable sofa”が、「あまり暖かくない弱い暖炉 (ineffectual low fire) | (292) 」に対し“a blazing fire”が、「天国にいる幼い William と Martha (little William and Martha in heaven) | (295) 」に対し“his two ruddy little children”が置かれている。そして Blandmour に対し「もし金持ちが私に対し、貧乏人について都合の良いことを言ったら、私はそれをこう決めつけてやります (if ever a Rich Man speaks prosperously to me of a Poor Man, I shall set it down as—)」と語り手は言いかけるが、自らも“a label-maker”になる危険を感じ、「いや、もう止めておきましょう (I won't mention the word.) | (296) 」とそれ以上口にすることなく、このパートを閉じる。

3. PICTURE SECOND: Rich Man's Crumbs

Coulter の家を訪れた翌年の夏、主治医に船旅を勧められた語り手はロンドンにやってきて、そこで「大変に友好的 (a very friendly) | (297) 」な「下級役人 (a civic subordinate) | (297) 」と知り合い、「ロンドン市長直轄の慈善行事 (our Lord Mayor's Charities) | (297) 」についての話を聞く。

“... You remember the event of yesterday?”

“That sad fire on the river-side, you mean, unhousing so many of the poor?”

“No. The grand Guildhall Banquet to the princes. Who can forget it? Sir, the dinner was served on nothing but solid silver and gold plate...; while the mere expenditure of meats, wines, attendance and upholstery, &c., can not be footed under £25,000-125,000 dollars of your hard cash.”

“But, surely, my friend, you do not call that charity—feeding kings at that rate?”

“No. The feast came first yesterday; and the charity after—to-day...” (297)

「・・・昨日の出来事を覚えていますか？」

「河岸の悲惨な火事のことですか？大勢の貧しい人たちが住む家を失ったらしいですね」

「いいえ、そうではありません。諸侯たちをもてなすロンドン市庁舎の大宴会のことですよ。どうして忘れられますか。ご馳走はすべて純金、純銀の皿に盛られましてね・・・肉、葡萄酒、接待、室内装飾等々の費用、しめて二万五千ポンド、つまり十二万五千ドルを下ることはないでしょう」

「でもまさか、それを慈善事業などと呼ぶわけではないでしょう。だってそんな巨額のお金で干様たちにご馳走するんですから」

「ごもっともです。まず最初に饗宴が行われるのです。それが昨日のことでした。そして次に慈善事業がくるわけでして、それが今日なんですよ。」

前記の遣り取りを見ていると、語り手を案内してくれる役人は、王侯たちをもてなす「ロンドン市庁舎の大宴会 (The grand Guildhall Banquet)」を「慈善事業 (charity)」と呼ぶあたりから、PICTURE FIRST の Blandmour に相当するこのパートにおける “a label-maker” であると考えられる。そして前夜に火事があったことを知らない、ないしはその重要性を認識しないあたりも Blandmour 同様、「楽天主義のラベルを所有している」と考えられる。

語り手はその役人に案内されて、この「慈善事業」を見学にし市庁舎まで出かけることになる。

Avoiding the main entrance of the hall, which was barred, he took me through some private way, and we found ourselves in a rear blind-walled place in the open air. I looked round amazed. The spot was grimy as a back-yard in the Five Points. It was packed with a mass of lean, famished, ferocious creatures, struggling and fighting for some mysterious precedence, and all holding soiled blue tickets in their hands. (298)

市庁舎の正面入り口は閉まっているので、ここは避け、彼は通用門の方から私を連れて入った。すると建物の後方の、盲壁に囲まれて青空の見える場所に出た。私は周りを見回してびっくり仰天。この場所は、ニューヨークの貧しいファイヴ・ポイント街の裏庭と同じように薄汚かった。そしてやせ衰え、飢えに苦しみ、どう猛になっている人間どもがわんさと詰めかけ、やみくもに先を争ってもみ合っていた。どいつもこいつも、手に汚れた青のチケットを握っている。

ここでも語り手は市庁舎の持つ表の面と裏の面の対比に注目している。

やがて2人は乞食どもに混じりながら、中の宴会場へと入る。語り手は周囲の乞食たちを観察し、次のように言う。

The beings round me roared with famine. For in this mighty London misery but maddens. In the country it softens. As I gazed on the meagre, murderous pack, I thought of the blue eye of the gentle wife of poor Coulter. (298)

回りの者たちは飢えで吠え猛っていた。というのもこの大都会ロンドンでは悲惨は猛り狂うもの。その一方、田舎では悲惨は抑えられる。瘦せた残忍な一団を見ているうちに私は貧しい Coulter の優しい夫人の青い瞳のことを思った。

貧しさに起因する悲惨はここロンドンではそのはげ口が外部へと求められ、ニューイングランドの田舎では自責として捉えられて内部に向かう姿を語り手は相次いで目撃し、ここで対比させているのである。

ほんの十二時間ほど前、ロシア皇帝やプロイセン国王、イギリス皇太子、その他無数の貴族たちが居並んでいた場所に到着すると、乞食たちは次々と係の役人に青のチケットを差し出し、食いちぎられたキジの残り肉や肉パイの縁などを受け取る。その様子を見て、案内の役人が語り手に語りかける。

“What a generous, noble, magnanimous charity this is! unheard of in any country but England, which feeds her very beggars with golden-hued jellies.”

“But not three times every day, my friend. And do you really think that jellies are the best sort of relief you can furnish to beggars? Would not plain beef, and bread, with something to do, and be paid for, be better?” (299)

「これはまたなんと寛大で気高く、高潔な慈善ぶり！乞食どもに黄金のゼリーを振る舞うなんて、イギリスならではのこと。他の国でしたら、前代未聞のことでしょう」

「でも毎日三度というわけではありませんからね。それにあなたは乞食に与える救援物資としてゼリーが最高品だと本気で考えているのですか？何か仕事を与えて、並みの牛肉やパンを買わせた方がよくはありませんか？」

この語り手の問いかけに対し、案内の役人は「しかしここでは並の牛肉やパンは食されなかったのです (But plain beef and bread were not eaten here.)」(300)と全く問題の核心に触れようとしない。Blandmour 同様、「ラベルが問題視されるとラベルに合わせるために現実の方をゆがめている」のである。「だから残り物でちょうど良い (So the leavings are according.)」という案内人は「王様のパンくずとリスのパンくずが同じだと思えるかどうか教えてほしいものだ (Tell me, can you expect that the crumbs of kings can be like the crumbs of squirrels?)」(300)とまで言う。「王様のパンくず」はいくら材料が良くともそこに真心や愛情は一切こもっておらず、真心がこもっていない点では「リスのパンくず」と全く同じなのだ。その点、Martha の作ってくれたプディングと好対照をなしているといえる。

その後、近くにいた見張りの役人に語り手は乞食と間違えられそうになるが、案内の役人が事情を説明し、事なきを得る。その役人によるとうじき大騒動が始まるから急いで外に出た方がよいとのことだが時すでに遅く、既に最後のご馳走が与えられ終わったところだった。まだ喰い足りていない暴徒どもがすさまじい叫びを発し、あたりの空気は悪臭で一杯になる。

That one half-hour's peep at the mere remnants of the glories of the Banquets of Kings; the unsatisfying mouthfuls of disembowelled pasties, plundered pheasants, and half-sacked jellies, served to remind them of the intrinsic contempt of the alms. In this sudden mood, or whatever mysterious thing it was that now seized them, these Lazaruses seemed ready to spew up in repentant scorn the contumelious crumbs of Dives. (301)

干たちの饗宴に出された豪華なご馳走の単なる余りものを半時間のぞき見し、中身を抜かれたパイや荒らされた雉肉、半分しか残っていないゼリーをいくらか口にしても食欲は満たされず、これに拍車をかけられた格好で、彼らは施し物に内在する侮辱を身にしみて感じ取ってしまったのだ。突然そんな気分、あるいはどんな不可解な気分であれ、それにとらわれ、これら貧しきラザロどもは悔し紛れの侮蔑のうちに傲慢な金持ち (Dives) の食べ残しをはき出してしまつつもりであるかのようにすら見えた。

ここに登場する“crumbs of Dives”とはルカによる福音書第16章の金持ちとラザロのたとえ話から来ており、この PICTURE SECOND の表題、“Rich Man's Crumbs”もここに由来していると考えられる。貧乏人にパンくずを与え、それで貧乏人の飢えが多少なりともしのげるのであれば、それは効率的であるといえるかもしれない。だがしかしそこには愛のかけらもなく、それはイエスがもっとも嫌うところであったのかもしれない。イエスが教えた「愛 (charity)」, その本来の意味から最も遠ざかった「慈善事業 (charity)」の姿がここに見事に描き出されていたと言って良い。

2人は何とか外に逃げ出すことに成功するが、語り手の服はもみくちゃにされ、ぼろぼろになってしまう。ロンドンの貧者たちが語り手の服に対して執った態度は、語り手の服装を見て、自責の念にかられる Martha とは好対照な結果に終わる。案内人に貸し馬車に乗せてもらい、語り手は何とか宿屋へとたどり着くことが出来る。

4. 結び

以上のように二つのパートを続けて体験した語り手は最後に次のように述べてこの物語を終えている。

“Now, Heaven in its kind mercy save me from the noble charities of London,” sighed I, as that night I lay bruised and battered on my bed; “and Heaven save me equally from the ‘Poor Man's Pudding’ and the ‘Rich Man's Crumbs.’” (302)

「やれやれ、慈悲深き天の神よ、ロンドンのご立派な慈善行為だけはもうごめんです。私は、その晩、打ち傷にへとへとなった身体をベッドに横たえながらため息を漏らした。「それから天の神よ、『貧者のご馳走』も『富者の食べ残し』も、どちらも同じようにごめんです」

どうやら語り手にとっては効率を無視した愛も、愛無き効率も、どちらも受け入れがたい、ということになるようだ。

Works Cited

- Dillingham, William B. *Melville’s Short Fiction: 1853-1856*. Athens: Univ. of Georgia Press, 1977.
- Melville, Herman. “Cock-A-Doodle-Do!” In *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. Vol. 9 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1986, 268-88.
- . “Poor Man’s Pudding and Rich Man’s Crumbs.” In *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. 289-302.
- Sealts, Merton M., Jr. “Historical Note” In *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. 457-533.
- 岡村仁 · |Herman Melville の “The Two Temples” について| 『新潟大学教育学部研究紀要』第2巻第2号：人文・社会科学編，2010年. 127-134.
- 『聖書』日本聖書協会，1982年.